

特集「大会支援のためのクリエイション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

ACA2019 Nagoyaのビジュアルデザイン
Visual Design of the ACA2019 Nagoya

多田 真奈美
Manami Tada

グラフィックデザイナー
Graphic Designer

1. ACA2019 Nagoyaのテーマとおもてなし

2019年11月29日～12月2日に、第5回アジア色彩学会(ACA2019 Nagoya)が名城大学ナゴヤドーム前キャンパスで開催された。大会テーマは“Color Communications”。基調講演2件、招待講演9件、口頭発表67件、ポスター発表68件に加えて、セミナーやワークショップ、企業出展が企画され、350名以上が関わる活況な大会であった¹⁾。また、学術プログラムのみならずジャパンカルチャーを前面に出したホスピタリティで、国内外の参加者に“名古屋”を周知するとともに、地域文化も楽しめるようにした。

2. ビジュアル制作の目標

本大会は遠方からの参加者が多いため、ビジュアル制作において二つの目標を設定した。一つ目は、名古屋らしいデザイン表現である。日本らしさはもちろんのこと、地域の伝統や文化が反映された表現を目指した。二つ目は、参加者に情報が伝わりやすいデザインである。視覚効果により言語レスに一目で情報が伝わるように心がけた。

3. 基本デザインの作成

3.1 ロゴマーク

“ACA”の文字で伝統と斬新さを表現した(図1)。左右の“A”の勾玉形は名古屋城の金鯢をイメージした。金鯢は徳川家康の支配力や尾張徳川家の権威を誇示するために作られた絢爛豪華な天守閣飾りであり、会場の名城大学シンボルマークにも使われている。“C”には色彩学会らしく、色相環を配置した。



図1 ロゴマーク



図2 テーマカラーとデザインモチーフの組合せ

3.2 テーマカラー

大会のテーマカラーは、緋、金色、本紫の3色をメインにし、さらにサブカラーとして縹色、苔色の2色を追加し、全5色とした(図2)。

緋(あけ):「茜」で染めた深く鮮やかな赤色。辰砂や神社の鳥居、狸々(名古屋南部に伝わる架空の生き物)のイメージから採用。

金色(こんじき):名古屋城を象徴する金鯢の色であり、豊かさや権力を表す色。

本紫(ほんむらさき):愛知県のシンボルである花、カキツバタのイメージから採用。本紫は紫紺染めの高貴な色で、古代では冠位最上位の禁色とされた。

縹色(はなだいろ):「藍」で染めた青色の古名。露草が一面に咲いた「花田」の意味もある。

苔色(こけいろ):濡れた苔の深く柔らかな緑色。

3.3 デザインモチーフ

名古屋城本丸内で見かけた様々な日本の伝統紋様をパターン化してデザインモチーフを作成し、色彩と重ね合わせて使用した(図2)。

七宝紋様:名古屋城本丸の取手金具にみられた紋様。円=縁を永遠に繋ぐ吉祥紋で、「七宝」の名はご縁が仏教の七つの宝のように尊いという意味から来ている。

高麗緑小紋:名古屋城本丸の豊縁の紋で別名「九條紋」。二条城や京都御所でもみられる格式高い紋様である。

葵紋様:名古屋城本丸の欄間でみられる紋様。葵は神紋とされ、三葉葵は徳川家の家紋として有名である。

鱗紋様:龍や蛇の鱗に似ている厄除けの紋様。

市松紋様:別名「石畳」、佐野川市松が歌舞伎の衣装に使ってから「市松紋様」と呼ばれるようになった。

4. デザインの展開

4.1 フライヤー

研究発表の募集案内(Call for Papers)には、テーマカラーとデザインモチーフを盛り込んだ(図3)。名古屋の位置を示す日本地図を配置し、名古屋城の茶室に見られる金の茶釜や、秋の紅葉の写真を掲載し、大会参加への期待が高まるようにした。また、金丸克司氏



図3 発表募集フライヤー



図4 基調講演フライヤー



図5 ポスター

による基調講演のフライヤーには本紫、矢口博久氏の講演には緋色を採用し(図4)、当日の会場誘導にも活用した。なお、フライヤーは英語版と日本語版とで文字量が大幅に異なることを踏まえて、レイアウトを工夫した。

4.2 ポスター

ポスターは、ロゴマーク、デザインモチーフ“七宝紋様”, テーマカラー3色を用いて、シンプルかつ大胆に構成した(図5)。文字情報は、大会名、開催日時、“Welcome to Nagoya”, 大会サイト URL という最小限にとどめた。

4.3 立て看板, バナー, スクリーン画像

ポスターと統一したデザインを心がけた。バナーは布地への印刷のため色の再現性が懸念されたが、美しい発色で仕上がり、多くの参加者が記念撮影の背景に使っているのを見かけた。

4.4 表示計画

事前に現地を視察して動線を確認し、表示デザインと設置場所を決めた。テーマカラーとデザインモチーフの5種類の組合せを使って会場をゾーン分けし、フロア図を作成した(図6)。参加者の色覚多様性に配慮し、色彩だけでなく形によって判別できるようにした。

4.5 その他

その他の製作物を図7に示す。予稿集(Proceedings)の表紙もポスターデザインをベースに作成した。名札デザインにも表示計画の色彩と紋様の組合せを用い、実行委員、学生スタッフ、参加者を遠くから瞬時に区別できるようにした。ランチチケットなども同様である。

5. まとめ

本大会のデザインワークは、制作物が多岐に渡り種類も多く、英文と和文の双方が必要なものもあり、対応に工夫と時間を要した。しかし、予めデザインコンセプトを明確にして進め、統一感のあるビジュアルで参加者を迎える支援ができた。また、このクリエイションを通し、私自身が改めて日本と名古屋の文化が

持つ美しさについて考えるきっかけにもなったので感謝したい。

参考文献

- 1) 川澄未来子：第5回アジア色彩学会開催報告, 日本色彩学会誌, 2010, Vol.43, No.1, pp.40-41

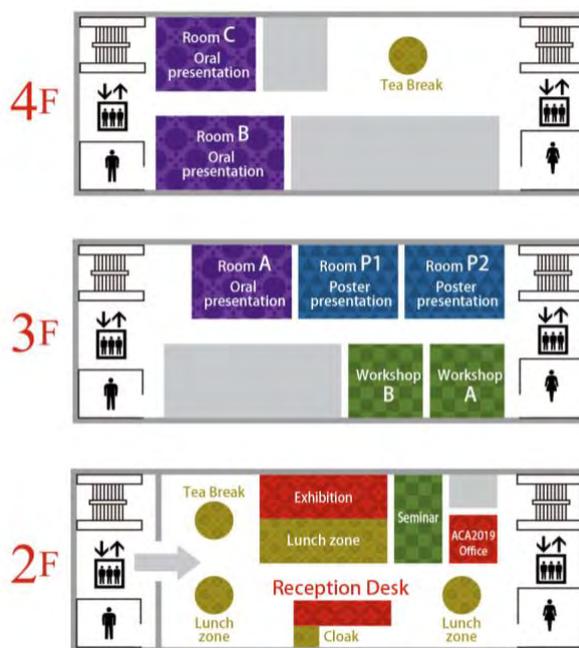


図6 フロア図



図7 名札, チケット, 予稿集, 記念クッキー